



# Risk Flash No.92(Vol.3 No.30)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター  
発行責任者：リスク研究センター長 久保英也  
〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1  
TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189  
e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp  
Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

●経済の視点：天然資源と経済成長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page 1
●今週の論文紹介：『女人芸術』と生田花世——「私語り」とその文学的試み・・・	Page 2
●教員紹介：石井良一・リスク研究センター通信・・・・・・・・・・・・・・・・	Page 3

## 経済の視点

### 天然資源と経済成長

おおむらひろたか  
社会システム学科講師 大村啓喬

新聞や雑誌では、急激な経済発展を遂げている途上国（BRICs など）の現状を伝える記事が多数掲載されています。バブル崩壊後、低経済成長に喘ぐ日本経済にとって、成長を達成するための手段は最大の関心事といえるでしょう。世界には、繁栄の道筋を順調に進む途上国がある一方で、日本と同様に低経済成長に悩んでいる途上国も存在します。なかでも、経済成長にとって大きな武器となると思われる天然資源を豊富に保有している国が、自国の低経済成長に頭を悩ませている場合も多々あります。なぜ、豊富に存在する天然資源の存在が経済成長を推し進めるのではなく、成長を阻害する原因になってしまうのでしょうか。

天然資源が低経済成長をもたらすメカニズムとして、「オランダ病（the Dutch disease）」仮説があります。「オランダ病」仮説によれば、豊富な天然資源は、国家に莫大な財政収入をもたらす一方で、資源部門の輸出ブームを招き、保有国の実質為替レートの高騰を引き起こしてしまいます。自国通貨の高騰は、生産要素価格の上昇だけでなく、輸入材の価格低下をもたらすため、結果的に資源保有国は天然資源以外の貿易部門の国際競争力が低下し、高い経済成長率を達成できないとされています。また、天然資源が生み出すレント（余剰）の存在も大きく作用すると言われていています。大規模なレントは、政府・官僚機構の腐敗や社会・経済政策の歪みをもたらします。そして国内の生産者側にとっても、生産活動の効率化よりも政府による再分配政策や公共投資を求めて媚を売るレント・シーキングの誘因が高まるため、経済成長が阻まれることになるのです。そして最後に、天然資源が保有国の経済成長に寄与するか否かは、資源を管理する国内制度の違いに依存しているとも考えられています。国内制度に欠陥がある場合には、資源を効率よく使用することはできず、保有国の経済は悪化してしまうと言われていています。

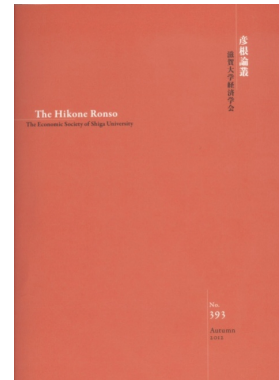
日本周辺に眠るとされている海底資源が、日本経済の救世主のように連日伝えられています。しかし、資源から生まれる富への欲望を抑えて適切に管理しなければ、豊富な天然資源が日本にもたらすのは恩恵ではなく、呪いになってしまうかもしれないのです。

## 今週の論文紹介

### 『女人芸術』と生田花世——「私語り」とその文学的試み

著者：社会システム学科准教授 菊地利奈

収録：『彦根論叢』（2012年秋号）



#### 著者のつぶやき

『女人芸術』（1928-1932）や生田花世（1888-1970）の名を知る人は、今はもう多くはないでしょう。『女人芸術』は、日本初の女性のための女性の手による文芸誌で、大正デモクラシーの洗礼を受けた「自由な精神を持った」多くの女性の作品を掲載しました。林芙美子（1903-51）がデビューをかざったのもこの雑誌で、デビュー作は今も読みつがれている『放浪記』でした。

1980年代以降、日本でもフェミニズム研究が盛んになり、女性作家・詩人の研究もすすんできましたが、スポットライトをあびるのは戦後が圧倒的に多く、戦前の女性文学についての研究は遅れています。しかし、昭和初期にはすでに多くの女性たちが「新しい文学」をめざして、文芸誌や文学雑誌で活躍していました。

生田花世も、そのような女性のひとりです。徳島に生まれ、若くして文学で身を立てることを決心し、単独で上京。女学校をでて教員免許を持っていましたが、大都会で花世を待ち受けていたのは、就職難と貧しさでした。花世は、住み込み女中をしたり、セクハラにあって泣く泣く上司と寝たり、すさまじい体験をしながらも、平塚らいてうの『青鞥』に加わり、短歌、小説、詩、感想、批評論文、随筆などをつぎつぎと発表していきます。1929年（昭和4年）には、『近代日本婦人文芸——女流作家群像』を出版。これは、日本初の女性の手による女性作家論です。花世は、時代の先端をゆくフェミニスト思想家であり、女性文士で、自分が文筆家として名をなしてからは、女性作家志望者の面倒をよくみて育てました。林芙美子がデビューできるよう口添えしたのも、花世でした。

本論は、『女人芸術』の創刊号から連載された「獅子は抗しがたし——三角関係の一端より」という、詩や短歌がちりばめられた日記スタイルの短編を分析し、文学史上忘れられがちな生田花世の文学活動を再考したものです。作品中のさまざまな文学的試みを分析することで、花世が「私」という個人の体験を、文学作品として昇華しようとしていることがわかります。

限られた教養、限られた発表の場と、女性が文筆活動をするのが社会でも家庭でも「戦い」だった時代に、文学への情熱を糧に人生を費やした花世。文学史には必ずしも名を残さない花世のような先駆者達がいたからこそ、戦後、女性文学が開いたといえるでしょう。

## 教員紹介 「石井良一」

今年4月に社会連携研究センターに着任して半年が過ぎた。社会連携活動に、後期から学部「都市経済論」、大学院「都市経済創発論」の授業が加わり、毎日忙しくしている。滋賀大学には平成15年から特任教授として関わっていたが、月に1、2回来る程度で、生活の中心は東京であった。こうして、彦根で生活していると地方都市の良さ、いやむしろ地方から日本再生が起こりつつあると感ずる。



ペンシルバニア大学での博士論文は「日米韓エレクトロニクス多国籍企業の組織展開と都市の変容（邦題）」であったことを思い出す。当時、日本企業は圧倒的に優位で、アメリカ企業は衰退、韓国企業はこれからという状況だった。日本企業はしのぎを削って後工程を地方部、前工程と研究機能を大都市郊外に置き、組立工場をアジアに分散させていた。その行動がそれぞれの地域構造に大きなインパクトを与えることを実証的に分析した。それが今やどうであろう。日本企業はAppleやSamsungなどの後塵を拝し、地方は工場縮小、撤退に揺れている。国内における市場の縮小、電力供給の不安定さ、円高、アジア市場の成長などで一段とグローバル化することが見込まれる。

衰退の中から再生が始まる。彦根でもそうであるが、さまざまな主体が連携し、環境エネルギー、福祉医療、農業、観光などの分野で新たなビジネス創発の芽吹きが見られる。「滋賀大マルシェ」を始めたのも農業、食ビジネスに成長の可能性があると感じているからだ。

一方、行政組織の硬直性に、地域経済再生を阻む大きなリスクを感じている。自治体中堅職員の意識改革のために「公共経営イブニングスクール」をやっていたり、自治体の事業を納税者視点で改革するために「事業仕分け」をやっているのは、それを打破するためだ。従来型の国、県、市町という上位下達の意識では地域経済再生のコーディネーションはできない。

これからどんな社会になるか楽しみである。淡海という場を得て、皆様と一緒に日本再生に向けて、地域発の動きを作るべく活動していきたいと思う。よろしくお祈りします。

社会連携研究センター教授 いしりょういち 石井良一

## リスク研究センター通信

### 日本リスク研究学会第25回年次大会開催のご案内

自然科学系も含めたリスク研究に携わる研究者が部門横断的に集う「日本リスク研究学会」の第25回年次大会が今週末に以下の通り、滋賀大学彦根キャンパスで開催されます。リスク研究を重点研究領域として標榜する滋賀大学において当学会の年次大会がこの地で開催されること自体喜ばしいことです。更に、今回が同学会の25年記念大会となることから、シンポジウムや多彩な企画セッションも企画されています。

開催日：11月9日（金）、10日（土）、11日（日）

会場：滋賀大学彦根キャンパス

大会のプログラムは<http://www.sra-japan.jp/SRAJ2012HP/index.jp.htm>で詳しくご覧いただけます。

◆シンポジウムは下記日程で公開で行われますので参加は無料です。興味のある方は是非ご参加ください。

シンポジウムのご案内

- ・開催日時：11月10日（土）13:00～17:00
- ・開催場所：大合併講義室
- ・シンポジウムのテーマ「日本リスク研究学会：次の25年へ」

くぼひでや  
大会実行委員長：久保英也（滋賀大学経済学研究科教授、リスク研究センター長）

### 「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

#### 【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

#### 【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

#### 【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

#### 【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

#### 【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

\*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

( <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12> )

\*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、金秉基、久保英也、  
柴田淳郎、得田雅章、宮西賢次、山田和代

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:月一金 10:00-17:00）

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: [risk@biwako.shiga-u.ac.jp](mailto:risk@biwako.shiga-u.ac.jp)

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>